

『解体新書』のオランダ人翻訳者デイクテンについての研究

石田 純 郎

〔要旨〕『解体新書』のオランダ語原書 *Onleedkundige Taelen* (『解剖学表』)、(アムステルダム、一七三四年刊) について検討する。この解剖書は J・A・クルムスのドイツ語版原書をライデンの外科医ヘリット・デイクテンが翻訳刊行した。ライデン市公文書館と市立博物館ラーケンホールで一次史料を探索し、彼の履歴を明らかにした。デイクテンは一六九六年頃生まれた。一七一三年に外科医の親方ファン・リートのもとで徒弟外科医教育を開始し、一七一五年に徒弟修学証を獲得、一七一六年に親方をステーンフェルトに替えた。一七二一年に外科医の親方の資格を取得し、ブリー通りに外科医の店を開店した。ライデンの外科医ギルドで、彼は頻繁に役員に選出された。デイクテンは一名の徒弟を教育した。彼は五冊の外科書の刊行にかかわった。『解剖学表』は外科医の間によく普及したが、解剖図が小さく誇張があり、前近代的なバロック解剖学書として評価されている。

キーワード——『解体新書』、『解剖学表』、G・デイクテン、外科医ギルド、ライデン

一、研究方法

『解体新書』のオランダ語原書 'Ontleedkundige Tafelen' (『解剖学表』、アムステルダム、一七三四年刊)の訳者ヘリット・ディクテン (Gerrit) または (Gerret, Gerardas) Dichten' または (Dikten, Dickten, Diekte) について検討する。

オランダ・ライデン市公文書館およびライデン市立博物館ラケン・ホール蔵の一次史料より、ディクテンの基本的史実を明らかにして、二項で示した。

なお一七・一八世紀のオランダ人名は文書毎にその綴りが少しづつ異なり、ディクテンに関しても括弧内のように、いくつかの表記方法がある。カタカナ名の後の括弧内に、文書に記載された原綴りを示した。

次いで三項で、ディクテンのかかわった医学書について、オランダの図書館で実際に手に取って検討した結果を示した。

最後に『解剖学表』の評価について考察した。

二、外科医マスターとしてのディクテン (ライデンの一次史料より)

ヘリット・ディクテン (Gerrit Dichten) 自身の教育歴は下記のようなようである。

ヘリット・ディクテンはライデン市民の息子として、一六九六年頃に生まれる。⁽²⁾

一七一三年三月一日、一六歳の時より三年間、親方ヨハネス・ファン・リート (Johannes van Riet) の徒弟として、

一・一〇ギルダーを支払って働く契約をする。⁽¹⁾

一七一五年六月六日にヘリット・ディクテン (Gerrit Dickten) は徒弟修学証 (leerbrief) を得る。⁽¹⁾

一七一六年五月に親方をファン・リートからJ・ステーンフェルト (Joh. Steenveld) に替える。⁽¹⁾

次に、デイクテンの最初の師ヨハネス・ファン・リート (Johannes van Riet) について述べる。

ファン・リートは一六九六年二月より四、五年間、デイルク・クラメル (Dirk Cramer) の徒弟となる契約を結ぶ。⁽³⁾

一七〇一年に徒弟修学証を得る。⁽³⁾

一七〇二年に外科医親方となる。⁽³⁾

このファン・リートが教育した徒弟は、下記のように五名が記録されている。

①一七〇四年五月七日よりヘレット・ヘンリクス・ファン・ホーヘフェーン (Gerret Henricks van Hoogveen⁽⁴⁾、一五歳) を二年間徒弟として教育し、一七〇六年五月二日に徒弟修学証を交付する。一七〇八年にファン・ホーヘフェーンは親方を替える。⁽⁴⁾ 一七一五年にヘリット・ホーヘフェーン (Gerrit Hoogveen) は外科医親方となる。⁽⁴⁾

②一七〇六年五月二日にバスチアーン・レーンブルフ (Bastian Leenbrugh⁽⁴⁾、一四歳) を三年間徒弟として教育する契約を結ぶが、中断する。⁽⁵⁾

③一七〇七年七月六日よりコルネリス・フィンセント・ブルフェルス (Cornelis Vincent Burgers⁽⁶⁾、一一歳) を四年間徒弟として教育する契約を結ぶ。⁽⁶⁾ 一七〇九年六月六日に徒弟修学証を交付する。一七二二年五月よりブルフェルスは一年間、再び親方ファン・リートの家に寄宿する。⁽⁶⁾ 一七一三年五月にブルフェルスは親方を替える。⁽⁶⁾

④ヘリット・デイクテンがファン・リートの徒弟になったことについては上記した。⁽⁷⁾

⑤一七一四年八月一日にヘラルダス・プルファー (Gerardus Provoo⁽⁸⁾、一六歳) を四年間徒弟として受け入れる契約を結ぶ。⁽⁹⁾

ファン・リートの五名の徒弟の内、デイクテンを含む二名が外科医親方になり、二名は徒弟の記録しがなく、一名は途中で挫折し外科医教育を中断している。

次に、ディクテンの第二の師J・ステーンフェルト (Joh. Steenveld) について述べる。

ステーンフェルトは一六九九年に外科医親方の資格を得た。⁽¹⁾

理事長には一七一〇年、一七一四年、一七二八年、一七三二年、一七三六年、一七四〇年の計六回任命された。⁽¹⁾

また町外科医を一七〇五年以来、務めている。

ライデンの外科医ギルドにおけるディクテンの役員としての履歴を示す。⁽¹⁾

ディクテンはライデンの市当局の監督下に外科医ギルドが施行する外科医資格試験に合格して、一七二二年に外科医親方になった。⁽¹⁾そして目抜き通りブリーストラート (Bree straat) に外科医の店を開いた。

下記の年にディクテンは役員候補に推薦された。括弧内はその時の候補者内での順位を示す。

一七三二年(六位)、一七三三年(六位)、一七三五年(五位)、一七四〇年(五位)、一七四三年(二位)、一七四七年(二位)、一七五一年(一位)、一七五五年(二位)、一七五九年(一位)、一七六三年(一位)、一七六七年(一位)。

役員に選出された年とそのポストを示す。

試験係マスターには一七四〇年、一七四七年、一七五一年の計三回選出された。⁽¹⁾

またギルド規約によると、理事長は試験係マスターに選ばれた翌年に任命されるので古文書には記録されていないものの以下の年にも、ディクテンが試験係マスターに就任していた可能性が強い。

一七四三年、一七五五年、一七五九年、一七六三年、一七六七年。

そしてディクテンは理事長には一七四四年、一七四八年、一七五二年、一七五六年、一七六〇年、一七六四年、一七

六八年の計七回選出された⁽¹¹⁾。

すなわちデイクテンはライデンの外科医ギルドの中枢にあり、ギルドの要職を歴任した外科医であると評価出来る。デイクテンは一七七〇年七月二日にライデンで没した。

このデイクテン自身が教育した徒弟一一名を列記する。

- ①ヨハネス・アンケン (Johannes Anken) はまず一七一六年二月二日、一六歳の時ホーヘフェーン (Hoogveen)⁽¹²⁾ 親方の徒弟となる⁽¹²⁾。次いで一七一九年二月六日に親方をヘンドリック・ユールホルン (Hendrik Uthoorn)⁽¹³⁾ に替える⁽¹²⁾。一七二二年九月二日に親方をヘリット・デイクテン (Gerrit Dicken)⁽¹²⁾ に替える⁽¹²⁾。
- ②フランシスカス・ファン・デル・ファイフテ (Franciscus van der Fichte)⁽¹⁴⁾ は一七二二年五月七日、一五歳の時より二年間徒弟として、ヘリット・デイクテ (Gerrit Dicke)⁽¹⁴⁾ に師事することを契約する⁽¹⁴⁾が、一七二二年一月に中断する⁽¹⁴⁾。
- ③ジャン・ロンドー (Jean Rondeau)⁽¹⁵⁾ は一七二二年一月三日、一五歳の時より三年間徒弟として、ジャン・ポルヘル (Jean Porcher)⁽¹⁵⁾ に師事する契約をする⁽¹⁵⁾。一七二三年一月三日に徒弟修学証を得る⁽¹⁵⁾。一七???(判読不能)年三月七日より親方を二年間ファン・ファン・ステーンフェルト (Jan van Steenveld)⁽¹⁵⁾ に替える⁽¹⁵⁾。一七二七年一月五日に親方をヘリット・デイクテ (Gerrit Dicke)⁽¹⁵⁾ に替える⁽¹⁵⁾。
- ④ヘンドリック・マスティック (Hendrick Mastik)⁽¹⁶⁾ は一七二三年二月三日、一二歳の時より四年間徒弟として、ヘリット・デイクテン (Gerrit Dicken)⁽¹⁶⁾ に師事する⁽¹⁶⁾。一七二五年三月七日に徒弟修学証を得る⁽¹⁶⁾。一七二七年九月五日に親方をヴィレム・ファン・エリントクハウゼン (Willem van Elinkhuysen)⁽¹⁶⁾ に替える⁽¹⁶⁾。一七???(判読不能)年九月一日に親方をアレント・ファン・ホイステン (Arent van Heusden)⁽¹⁶⁾ に替える⁽¹⁶⁾。一七二九年一〇月五日に親方をヤコブス・ル・ディユー (Jacobus le Dieu)⁽¹⁶⁾ に替える⁽¹⁶⁾。

- ⑤ヤン・ドウ・ブリー (Jan du Blee) は一七二三年八月二三日、一四歳の時より二年間徒弟として、ベンジャミン・マロン (Benjamin Maron) に師事する⁽¹⁷⁾。一七二五年九月五日に徒弟修学証を得て、親方をコルネリス・アブコウ (Cornelis Abcou) に替える⁽¹⁷⁾。一七二九年 (判読不能) 一月七日に親方を J・ホウツツイン (Joh. Houttuin) に替える⁽¹⁷⁾。一七二九年 (判読不能) 五月一日に親方をヘリット・ディクテ (Gerrit Dicte) に替える⁽¹⁷⁾。
- ⑥ヤン・フィリップス・ロス (Jan Philippus Ros, ヴァルトロップ (Waltrop) 生れ) は一七二五年九月五日、一四歳の時、徒弟としてヘリット・ディクテ (Gerrit Dicte) に師事する⁽¹⁸⁾。
- ⑦ヒレブランド・ディウス・ビネマ (Hillebrandus Binema, スネーク (Sneek) 生れ) は一七二五年九月五日に徒弟として J・ブルデー (Joh. Broede) に師事する⁽¹⁹⁾。一七二五年一月七日に親方をヘリット・ディクテ (Gerrit Dicte) に替える⁽¹⁹⁾。
- ⑧ヤコブス・ル・ディユー (Jacobus le Dieu) は一七二六年一月一日、一二歳の時、ヘリット・ディクテン (Gerrit Dicken) の徒弟となる。一七二九年に外科医親方の資格を得る⁽²⁰⁾。
- ⑨ダヴィッド・ムニエール (David Mounier) は一七二六年六月五日より二年間徒弟として、ヨハネス・ホイケロム (Johannes Heukelom) に師事する⁽²¹⁾。その後、親方をヘリット・ディクテン (Gerrit Dicken) に替える⁽²¹⁾。
- ⑩ニコラース・フーシユ (Nicolaas Goeis) は一七二七年一月八日、一六歳の時より四年間徒弟として、ヘリット・ディクテン (Gerrit Dicken) に師事する⁽²²⁾。一七二九年に徒弟修学証を得る⁽²²⁾。
- ⑪、マタイス・アルデルケルク (Mathijs Alderkerk, スーテルメル (Soetermeer) 生れ) は一七二九年七月八日、一〇歳の時、徒弟としてヘリット・ディクテン (Gerrit Dicken) に師事する⁽²⁶⁾。一七三一年八月に徒弟修学証を得る⁽²³⁾。一七三二年八月六日に親方をイザック・カレル (Ysack Carel) に替える⁽²³⁾。一七三三年七月一日に親方をヴェッド・ファン・ヤコブ・アレルス (Wed van Jacob Allers) に替える⁽²³⁾。

デイクテンの指導した徒弟一一名のうち、外科医親方の資格を得たことが記録されている者は二名にすぎない。八名は徒弟の記録のみしかなく（しかしながら、この八名が親方にならず、修業を途中で中断したとは断定出来ない）、一名は途中で中断している。

修業を中断した一名を除く一〇名の徒弟のついた親方の数を数えてみる。

四名の親方に師事した徒弟が二名、三名の親方に師事した徒弟が三名、二名の親方に師事した徒弟が二名、ひとりの親方にしか師事した記録がない徒弟が三名である。

師事した親方数の少ない徒弟は、記録に遺漏がある可能性もあるので、徒弟期間中に師事する親方は当時三、四名が平均的なものではなかったであろうか。

この内、第一の弟子ヨハネス・アンケン (Johannes Anken) が師事した別の親方、ヘンドリック・ユールホールンは日本の蘭学にとり、デイクテン同様、重要な外科医である。

一七三九年六月二八日、四三歳の時デイクテンはライデン大学に入学登録し、一七四〇年までにMDの学位を得た。⁽²⁴⁾

三、デイクテンの著作

デイクテンの著作を検討する。目録⁽²⁵⁾に記載されているデイクテンに係する著作は下記の五点に過ぎないが、その内、本当の意味での著訳書は①の『解剖学表』の一冊だけで、他の本はその序文や出版をデイクテンが担当しただけに過ぎない。

各冊について、筆者はオランダのライデン大学中央図書館、ライデン・プールハーヴェ博物館図書室、アムステルダム大学中央図書館などで現物を閲覧し検討した。

① Kulmus (Joh. Ad.), *Ontleedkundige tafelen, benevens de daar toe behoorende afbeeldingen en aanmerkingen, waar in het zaamenstel des menschelyken lichaams, en het gebruik van alle des zelfs deelen afgebeeld en geleerd word. In het Nederd. gebr. door Ger. Dichten. Amsterdam 1734.*

クルムスのドイツ語版解剖書のディクテンによる翻訳。一七三四年刊。『解体新書』の原著。

この本の由来については前述した。

さて『解剖学表』には、その巻頭に左記のような献辞がある。⁽²⁶⁾

献 辞

オランダにおける著名なライデン大学の解剖学と外科学の教授であり、しかも偉大にして高名な解剖学者、医学博士⁽²⁷⁾ Bernhardus Siegfried Albinus 先生に捧ぐ。

偉大にして博学なるアルビヌス先生、わたしが解剖学について知っていることは、私が先生の学識ならびに親切なお教えに負うところが特に大であります。(中略)この本(『解剖学表』)が、先生のはなはだお好きな称賛すべき学識である解剖学と外科学⁽²⁷⁾の奉仕と利益のためにオランダ語に翻訳されたことを、先生は認めておられるからであります。しかも、偉大で、かつ精細な知識によって先生は、解剖学と外科学の領域では、はなはだすぐれておられます。(後略)

博学にして高名なる先生へ

あなたの従順にして恩義ある召使い

外科医 Gerardus Dichten より

ライデン

一七三三年二月二〇日

このように、デイクテンは当時のライデン大学医学部の解剖学教授ベルンハルト・シークフリート・アルビヌス(Bernhard Siegfried Albinus, 1697-1770)を尊敬していると述べている。

デイクテンがライデンの外科医ギルドの要職を歴任していたころ、アルビヌスはこの外科医ギルドの会長を務め、ギルド会員に解剖供覧を実施し、外科医に学問的恩恵を与えていた。

そうしたこともあり、デイクテンはアルビヌスと親しく、彼を尊敬しており、この本の刊行の際、一冊をアルビヌスに謹呈したと、『解剖学表』の巻頭⁽²⁶⁾に記されている。

このB・S・アルビヌスはきわめて精密で写実的な解剖学図譜を一七二〇年代から三〇年代にかけて公開し、これがオランダにおける近代解剖学の始まりとされている。⁽²⁸⁾

一方デイクテンの『解剖学表』は、装飾過多のバロック解剖学で前近代的な解剖書であるとオランダの医史学界では評価⁽²⁹⁾されている。

この点については、この論文の四項で検討する。

② Deventer (Hendr. van), Beschryving van de ziekten der beenderen. En inzonderheid van de rhachitis of Engelsche ziekte. Als meede Verhandeling over het voedzel der beenderen enz. door Louis Lemery. Bonevens nieuwe ontledkundigeaamnerkingen over de ziekten der beerderen enz. door Jean Jos. Courtilal. Beide uyt het Fr. vert. en uitg. door Ger. Dicken. Leyden 1739 -2^odr. Leyden 1765.

フランス語版病理学・病理解剖学のデヴェンテル(Deventer)による翻訳書のデイクテンによる出版。一七三九年刊、

第二版一七六五年刊。

この本の題名は全二〇三字にのぼる長いもので(一七一―一九世紀の蘭書のタイトルは、一般的に言って長い)、原著者のルイ・レメリー (Louis Lemery) の肩書きは、見開きに記されている *docteur en chirurgie*、*Doctor Regent der Geneeskunde* (上級内科医) であり、パリの王立アカデミーに属した。

筆者はこの本の現物を、ライデン大学中央図書館で確認した。

翻訳者ヘンドリック・ファン・デヴェンテル (Hendrik van Deventer) について、簡単に記す。一六五二年三月十六日に生まれた。⁽³⁰⁾ 彼の墓の碑文によるとハーグ生まれとなっているが、ライデンのホーホラント教会 (Hooglandische Kerk) で一六五一年三月一九日に洗礼を受けた記録があり、ライデン生まれが正しいであろう。⁽³⁰⁾ 父は皮革製品の商人で、デヴェンテルは金細工師として訓練された。

一七歳の時、フランスの聖職者ラバディ (Jan de Labadie) と出会い、彼のグループの一員となり、あちこち放浪しながら、内科、外科、産科の技術を身につけた。⁽³⁰⁾

ウィーウェルト (Wieuwerd) で開業したが、一度以上デンマーク宮廷に呼ばれ、くる病で曲がった骨の整形外科的治療の供覧を行なった。この時点での彼の医療職としての位置付けは、ギルド外科医、あるいは巡回医療職 (Quack) 専門職種であったと考えられる。

一六九四年一月一日、四〇歳の中年になって、グローニンゲン大学で MD を取得し、内科医の資格を得た。⁽³¹⁾

この論文審査は、彼がラテン語を理解しなかったため、非公開で例外的にオランダ語で行なわれた。⁽³⁰⁾

ラテン語の公的使用が常識のオランダの大学で、一七世紀末に卑語であるオランダ語の使用が認められることは稀であった。グローニンゲン大学が二流大学であったことと、彼の技術と学識が高く評価されたことにより、それが可能となったであろう。

その後ハーグ近くのフォールビュルフ (Voorburg) で開業し、一七二四年十二月二日に七三歳でフォールビュルフで没した⁽³⁰⁾。

③ Munniks (Joh.), Alle de wercken, bestaande in de practyk der heelkonst, vert. door Dan. Havart. Verhandeling over de ontleedkunde, nu eerst uit het Lat. vert. En verhandelinge van de wateren, vert. door Dav. van Hoogstraten. Met een voorr. over het geheele werk door Ger. DICTEN. Amsterdam 1749.

ラテン語版外科書のムニックス (Munniks) による翻訳書の序文をテイクテンが担当。一七四〇年刊。

アムステルダム大学中央図書館に蔵されるが、この本のみ筆者はオエックを失念した。

記者ヨハネス・ムニックス (Johannes Munniks) は一六五二年一月一六日に薬剤師の息子としてウトレヒトに生まれ⁽³¹⁾た。

一六七〇年にウトレヒト大学に入学登録を行ない、一六七〇年十二月二日にMDを取得して卒業した⁽³²⁾。

一六七七年にウトレヒト大学解剖学講師、一六七八年に員外教授、一六七九年に正教授に就任した。学部長を一六九二―一六九三年、一六九三―一六九四年及び一七〇一―一七〇二年と三回務めた⁽³²⁾。

一七二一年六月一〇日に六八歳でウトレヒトで没した⁽³²⁾。

④ Scultetus (Joh.), Het vermeerderde wapenhuis der heel-meesters. Waarin alle de kunstbewerkingen en afbeeldingen der werktuigen tot de heelkunst nodig, gevonden worden. Alsmede deszelfs aanmerkingen. En 100 heelkundige waarnemingen, verzamelt van Joh. Bapt. van Lamzweerde. Waar by gevoegt zijn twee aanhangzels over dezelve stof, en eenige aanmerkingen van P. Az. Verduin. Benefens een kort begrip of te inleiding tot de

chirurgie. Alles na de laatste Lat. druk vert. en vern. door Ger. Dichten. 2 dln. Amstelerdamme 1748.

ラテン語外科書のファン・ラムズヴェールデ (van Lamzwerde) による翻訳書の序文をディクテンが担当。

ドイツ人原著者ヨハン・シヨルツ・スクルトウス (Johann Scholz Scultetus) は一五九五年一〇月一二日にドイツのウルム (Ulm) に生まれ、一五歳でパドバ大学に入り医学を学び、一六二一年に医師の資格を得る。^{(32), (34)}

その後ウィーンへ行き、三〇歳でウルムに帰り、市医となった。一六四五年二月一日にシュトゥットガルト (Stuttgart) で客死した。享年五〇歳。^{(32), (34)}

彼の没後の一六五三年に同姓同名の甥がこの本の原書を編集・公刊した。

この甥は一六二一年八月七日にニュルンベルク (Nürnberg) に生まれ、そこで開業し、一六八〇年二月二三日に没した。^{(33), (34)} 享年五八歳。

オランダ語へ翻訳し増補したのはヨハネス・バプティスタ・ファン・ラムズヴェールデ (Johannes Baptist van Lamzwerde) というオランダ人で、一六三〇年頃、ウトレヒトで生まれ、ウトレヒト大学で医学を学んだ。⁽³⁵⁾

彼はMDだけでなくPhDも名乗っていたが、PhDを取得した証拠は見当たらない。⁽³⁵⁾ 一六五七年六月二〇日にウトレヒト大学でMDを取得して卒業、アムステルダムで開業した。

一六八三年頃ケルンに移り、解剖学の員外教授を務めた。ケルン(?)で没した。⁽³⁵⁾

ファン・ラムズヴェールデの初版はまず一六七一年に出版された。その一七四八年の再版が上記の書で、外科医のため序文がディクテンにより追加されている。

一七四八年再版見開きのディクテンの肩書きはライデンの町とレインラント (Stadt en Rhymland) の産婆講師、ライデンの外科医である。

一七四八年再版についても筆者は実際に検分した。アムステルダム大学中央図書館、ライデン大学中央図書館、ライ

デンのブルーハーヴェ博物館図書館にこの本が所蔵されていることを確認し、その後二者をチェックした。いずれも同年版であるが、両者で微妙な違いが認められた。いずれも館外持出禁止なので、つきあわせての比較は不可能であった。ライデン大学版は上巻五四八頁、下巻五四五頁の計一、〇九三頁に索引を付す。大きさは一四・五cm×二二・二cm×六・三cmである。一方ブルーハーヴェ博物館版は上巻五四五頁、下巻五四三頁の計一、〇八八頁に索引を付した。大きさは一四cm×二二cm×六cmである。

しかしながら、収載されている多数の添付図の構図は同一のようである。

また一六七一年初版と一七四八年再版も、今回つきあわせての比較は行なえなかつたが、ディクテンの序文が後者に加えられたことを除き、大差はないようである。

添付図に限っては、同じようである。

日本最初の西洋医学書は一七〇六年の檜林鎮山による『紅夷外科宗伝』である。パレ (Pare) 原著の *Les Oeuvres de M. Ambroise Pare* (初版、一五七五年刊) の第四版 (一五八五年刊) をバトゥス (C. Battus) がオランダ語に翻訳して、『*De chirurgie en de Opera*』(一五九二年刊) として出版したが、『紅夷外科宗伝』の挿し絵は一六四九年刊のオランダ語版 (Schipper 版) より取られている (大村敏郎³⁶⁾)。

ところが最近、蒲原宏氏は『紅夷外科宗伝』の挿し絵はパレの本からだけではなく、このスクルトゥス本からも取られていることを明らかにした³³⁾。

『解体新書』のオランダ語版翻訳者であるディクテンがこの一七四八年版の序文を担当したわけで、日本の蘭学萌芽期におけるディクテンの重要性は一層増すことになろう。

⑨ Munniks (Joh.), *Alle heel-, ontleed- en geneeskundige werken. Uit het Lat. vert. door Dan. Havart en Dav. van*

Hoogstraeten. Met voorr. door Ger. Dieten. 2. dr. Nieuwe uitg. Amsterdam 1765.

ラテン語版外科学・解剖学・内科学書のミニックスによる翻訳書の序文をディクテンが担当。一七六五年刊。翻訳者ミニックスについては③で説明した。

この本は第二版の新版で、初版が刊行されたはずであるが、アムステルダム大学中央図書館、ライデン大学中央図書館、ライデンのブルーハーヴェ博物館図書館のいずれの図書館にもこの初版は蔵されていなかった。

しかし初版が一七四〇年に刊行されたことは確かである。なぜなら序文とタイトルページに1740と記されているからである。

アムステルダム大学中央図書館とライデン大学中央図書館に第二版が蔵されているが、その内、後者をチェックした。この本で注目すべきはディクテンの肩書きにMDが付いている点である。

彼は一七三九年六月二八日にライデン大学に入学登録を行ない、その学識ゆえに一七四〇年までにMDを授与されたのである。

四、オランダ解剖学における近代と『解剖学表』

オランダの医学界における共通の認識では、解剖学においてディクテンと同世代のB・S・アルビヌス (Bernhard Siegfried Albinus, 1697-1770) の解剖学書が、「近代的解剖学書」の始まりと考えられている^{(26), (27)}。

アルビヌスの解剖書は精密で写実的で正確な大きな解剖図を収めている。

一方、クルムスとディクテンの『解剖学表』は、近代的な解剖学書とはみなされておらず、「バロック解剖学」と評価されている^{(28), (27)}。すなわち、解剖図が小さく、装飾過多で、真実を伝えていないと考えられている。

ライデン大学の解剖学教授B・S・アルビヌスは、ディクテンが外科医ギルドの要職にあった時、そのギルドにかか

わっていた。そのため、ディクテンが一七三四年に『解剖学表』を翻訳・公刊した際に、この本の巻頭の献辞で、ディクテンはB・S・アルビヌスを称賛し、この本を彼に捧げたことを述べている。この点は三項の①で述べた。

オランダの近代解剖学の始祖とされるこのB・S・アルビヌスの履歴と解剖学上での業績、そして彼の解剖図作製法について、オランダの文献をもとに検討する。

B・S・アルビヌス (Bernhard Siegfried Albinus) は一六九七年二月二十四日にフランクフルト・アン・デル・オーダー大学教授で後にライデン大学内科学教授に就任したB・アルビヌス (Bernhardus Albinus, 1653-1721) を父に、スザンナ・カタリナ・リング (Susanna Catharina Ring) を母に、四男七女の長男として、フランクフルト・アン・デル・オーダー (Frankfurt an der Oder) で生れた。⁽³⁸⁾

父のライデン大学教授就任に伴い、B・S・アルビヌスは一七〇二年にライデンに転居した。⁽³⁸⁾ 一七〇九年九月一六日には一二歳という若さで、B・S・アルビヌスはライデン大学に入学登録し、まず哲学講義を受講し、次いでおそらく一七二二年から医学の勉強を開始した。彼は医学をRau' Bidloo' Deckers⁽³⁹⁾ およびBoerhave⁽⁴²⁾ から学んだ。一七一八年にはフランスのパリに留学し、医学の勉強を続け、Winslow⁽⁴⁴⁾ とDuverney⁽⁴⁵⁾ の解剖学と外科学の講義に出席した。しかし彼はバリーに六か月間しか滞在できなかった。⁽⁴⁶⁾

ライデン大学解剖学教授ラウ (Rau) が病気になるため、ライデン大学の管理者によりライデンへ呼び戻され、一七一九年六月二九日にライデン大学解剖学講師に任命された。⁽⁴⁷⁾ しかし彼はまだ学位を取得していなかったため、同年九月一九日に医学部の推薦により、学位審査を受けることなく、名誉医学博士号 (MD) を授与された。⁽⁴⁸⁾

そして同年一〇月二日には「比較解剖学 (de anatome comparate)」と題した開講講演を行なった。この講演の中で、彼は人間、動物、植物そして鉱物の解剖と生理の類似について説明した。⁽⁴⁹⁾

一七二二年九月七日にはプールハーヴェ教授の特別な推薦により解剖学教授に任命された。⁽⁵⁰⁾ 同年十一月一九日に教授

就任の開講講演 'Oratio quae in veram viam, quae ad fabricae humani corporis congruenter ducatur, inquiritur' 彼は正確な観察の重要性と、顕微鏡と静脈色素注射を利用した広い範囲の解剖学研究について、強調した⁽⁵¹⁾。この講演の内容にそって、彼は自分で人体のすべての部分の見事なコレクションを、完成させた⁽⁵¹⁾。そして静脈色素注射の技術を利用して、それらの標本の水準を完全と言えるまでに高めた⁽⁵¹⁾。静脈色素注射を利用した解剖標本は、現在もライデン大学解剖学研究室標本の特徴と伝統になっている。

アルビヌスは多数の剖検を行ない、彼の解剖学知識を充実させた。教授職についた最初の数年間は、彼はヴェザリウス (Vesalius) とエウスタキウス (Eustachius) が出版した解剖図譜を利用した。

一七二五年にアルビヌスはプールハーヴェと共に、ヴェザリウスの 'Opera omnia anatomica et chirurgica' 全二巻を刊行した⁽⁵⁴⁾。この本の解剖図はヤン・ワンデラー (Jan Wandelaar, 1690-1759) によって画かれたが、ワンデラーはすでに同様の解剖図の描写をプールハーヴェの友人の解剖学者ルイシュ (Ruyssch) のために行なっていた。ワンデラーの画は繊細で自然な姿に忠実であり、それがこのヴェザリウスの解剖書の新版の大きな特徴であった。

ヴェザリウスの製図者の芸術的手法 (artistic technique)——アルビヌスはこれを絵画的手法と呼んでいたが——にアルビヌスは賛意を表しはしなかったけれども、彼はこの本の公刊には協力した⁽⁵⁶⁾。

アルビヌスはエウスタキウスの図に見られる、より数学的なアプローチの方が人体の機械論的構造をより正しく表現するから、教育の目的に合っていると信じていた⁽⁵¹⁾。当時アルビヌスは恩師プールハーヴェ教授の唱える機械論の考えの中にいた⁽⁵³⁾。

アルビヌスが教授に就任してしばらくは、解剖学分野では、主として筋学と骨学に関心を持った。一七二六年に刊行した人体の骨に関する本 ('L'ibellus de ossibus corporis humani') の中で、骨の形はヴェザリウスとエウスタキウスの文献に従って左右対称に画かれ、文章でそれを説明してある⁽⁵²⁾。

この本の中で、彼は理想的に釣り合いのとれた人間 ‘homo perfectus’ (完全なる人体) の概念について、すでに言及している。⁽⁵⁷⁾ この概念は機械的平衡が健康の必要条件であり、これは人体の組織の最小部分にまであてはめることができるとしたブルーハーヴェの考え(機械論)にそっており、肉眼的水準でアルビヌスは ‘homo perfectus’ の概念を考えだしたのである。彼はこの ‘homo perfectus’ を最も可能性の高い、完全さの象徴であると考えた。⁽⁵⁸⁾

ヴェザリウスの ‘Opera omnia anatomica et chirurgica’ 全二巻を刊行した直後の一七二六年に、早くもアルビヌスとワンデラーは骨格と筋肉構造を写実的に描写する試みを始めた。多数の死体の中から、アルビヌスは理想的な骨格と理想的に均整のとれた骨と筋肉を持つ死体を選び出した。理想的な機械的均衡を表現するものと考えられた対称性が、その選択の際には重視された(筆者註 人体の形態や構造は決して対称的でないことは、現在の医学、解剖学では自明である)。⁽⁵⁹⁾ 一七三四年に刊行されたアルビヌスの筋学書 ‘historia musculorum hominis’ の解剖図は、手の筋肉を描写した秀れた図を含む人体の全筋肉の非常に詳細な解剖図である。ひと組みのコンパスと定規を利用して、紙の上に対象を転写させたヤン・ワンデラーの最初の仕事である。

アルビヌスの骨学と筋学の書の中で、すべての筋肉と骨とは個別に描写され、互いに関係づけられている。それぞれの筋肉ごとに、筋肉の骨の起始部と附着部を理想的に描写することにより、筋肉の構造が示されている。その最初の部分『骨格と筋肉』をアルビヌスは一七四七年に完成させ、⁽⁶⁰⁾ 一七五三年には引き続いて『骨』⁽⁶¹⁾ についての部分を刊行した。これらは解剖学専門家向けの程度の高いアルビヌス著の解剖学書 ‘Annotationes’ と呼ばれる八巻本の一部である。⁽⁶²⁾

アルビヌスの解剖図譜作製のパートナーである画家ヤン・ワンデラー (Jan Wandelaar, 1690-1759) の履歴と彼の解剖図譜作製の技法について紹介する。

アルビヌスがワンデラーと知り合いになったのは一七二三年のことである。⁽⁶³⁾ ワンデラーは ‘Folkema’ Gowen および De Lairesse の弟子であり、製図家、画家、銅版画工で彫版工であった。解剖図画家としての道を歩む前には、二、三人

のアムステルダム市長の肖像画を描いている。⁽⁶⁴⁾ ワンデラーはアムステルダムの解剖講堂で解剖学の勉強をし、フレデリック・ルイシユのために解剖標本の彫版を作製した。⁽⁶⁴⁾

ワンデラーはルイシユを介して、ブルーハーヴェとアルビヌスに出会ったと考えられ、前述したようにヴェザリウスの解剖図を描き直した。この仕事の間に、完全な解剖図の完成というワンデラーの芸術家としての抱負が、アルビヌスの解剖学者としての抱負とほとんど同じであることが判った。⁽⁶⁴⁾

ワンデラーの胎児骨と手を描いた習作は、たいへん出来が良かったので、アルビヌスはすぐ自分の解剖図譜作製のために、ワンデラーを雇用することに決めた。ワンデラーはライデンのアトリエで、最初の実験的な図の作製に一七二四年にとりかかった。⁽⁶⁷⁾

一七三二年にワンデラーはアムステルダムを去り、ライデン近くの小村ワーモンド (Warmond) に移り住んだ。数年後、一人息子が死亡した際、ワンデラーはアルビヌスの家に寄宿した。⁽⁶⁸⁾ こうして、解剖学者と画家の情報交換にとって、最高の環境ができた。

アルビヌスの仕事を通じ、常に画家の仕事を修正し、そのようにしてワンデラーを「画家の手の中にある道具のように」使った。アルビヌスがペトルス・カムベル (Petrus Camper) ⁽⁷⁰⁾ への手紙の中で記載されたこの表現では、ワンデラーをアルビヌスの手の中にある意志のない道具に喩えているように見える。しかしながらこれは、決して真実とは言えなかった。アルビヌス自身は画家ではなかったし、それ故に、彼は常に画家の熟練した技術を頼りにしなければならなかったからである。

ワンデラーはアルビヌスによる修正の命令を単純に受け入れ (理想的な解剖上の形状に関する修正)、一方アルビヌスはワンデラーの描写技術に影響をおよぼすどのような試みも控えた。アルビヌスとワンデラーの協力関係はこのような妥協の形をとった。⁽⁷¹⁾

ワンデラーが従うことを強いられた法則は、アルビヌスの 'homo perfectus' についての考え方と、解剖学的描写の客観性、対称性および生命力の追求に基礎をおいたものであった。人体の種々の部分をアルビヌスではできる限り客観的に描きたかったので、形状、位置、別の構造への変化、そして他の構造との関係などについて、正確に描写することが求められた。⁽⁷⁵⁾

言い換えれば、二つの次元において、人体の完全に真に迫った写し換えをアルビヌスは望んだ。そのため、正確な計測と正確なサイズでの紙への転写が必要となった。しかしながら、アルビヌスはそれぞれの対象の輪郭を明瞭に示すことを望んだので、客観的に表現するという上記の要求には不自然な要素が入り込んだ。筋肉は自然の状態で、輪郭ははっきりと示せないで、これはとくに筋肉の描写の際に大きな問題となった。⁽⁷⁶⁾

アルビヌスの 'homo perfectus' のための第二の必要条件は、均整によつて成し遂げられた美の理想である対称性であった。⁽⁷⁷⁾

人体の標本を年々収集することにより、それらの理想的な均整をアルビヌスは得ることができた。これらの理想的なサイズは、平均の、あるいはアルビヌスが提唱したように、自然ともつとも良く調和するもつとも普通のサイズであった。⁽⁷⁸⁾

アルビヌスは骨格を人体の基礎とみなした。他の器官システムがある種の法則や規則に従つて関係している人類の特殊な基質として、理想的に形づくられた骨格とともに、彼は理想的な人間の形状についての彼の考え方を紹介した。⁽⁷⁹⁾

アルビヌスの第三の関心は密接に生命に近い骨格に美の表現を与えることであつた。彼は長さ、優雅さ、そして調和に基礎を置いた生命力の表現を狙つた。⁽⁸⁰⁾

アルビヌスの 'homo perfectus' は数体の死体の寸法から計算された標準サイズの人体である。アルビヌスは人体が成熟して完成に達する歳を三〇歳と信じていたので、年齢が三〇歳前後の典型的な若い死体だけを選択し、彼の信じる

美の理想 'homo perfectus' を追求した。⁽¹⁷⁾

おおむね理想的なサイズの若い男性の死体を選んで、骨格を描写した。遠近法の歪みを伴うことなしに、できるだけ正確に 'homo perfectus' の割合を紙の上に転写する試みが行なわれた。⁽¹⁷⁾

—これを成し遂げるため、二段階で製図が行なわれた。⁽¹⁸⁾

第一段階では、四〇フィート（約一二m）の距離から 'foramen opticum' と名付けた覗き孔を通して、全身の骨格を描いた。そのため骨格の位置はすべてほぼ正確な角度で表現された。この方法は投射 (projectival) 法、あるいは構造 (architectonic) 法として知られる。七・三m四方の正方形のワクが骨格の直前に設置された。製図者側の紙の方眼の中に、それぞれの正方形の中の線が転写された。⁽¹⁸⁾

第二段階は、やはり四〇フィート（約一二m）の距離から描かれた輪郭の中に、さらに詳細に描かれた。さらに小さい一辺が七・三mm四方の正方形のワクを標本の手前四フィート（約一・二m）のところに正確に置き、そこからさらに細かく骨の輪郭をえどることになる。製図者もそのワクの手前に立ち、正方形のワクを通して、線をスケッチする。⁽¹⁸⁾

この方法でたいへんリアルな骨格図が描かれたのである。しがしながら、細部にわたると問題があった。足のように小さくて不規則な物体の描写の際に、遠近法による歪みが生じた。

アルピヌスはこの方法を個々の骨の描写に適用することはせず、コンパスと定規の助けを借りて、投影法で全身の骨格を完全に描写した。それは完全さの象徴として、左右対称に描かれた。

アルピヌスの偉大な業績は解剖学分野だけでなく生理学分野にもおよび、また一七四六年以後は解剖学教授から内科学教授へとその専門を変えた。アルピヌスの解剖学分野以外での業績については、ここでは触れない。⁽¹⁹⁾

アルピヌスの名声は主として彼の華麗な解剖図譜によって沸き上がった。彼は「完全なる解剖学 'anatomes perfectio'」の父と称賛され、彼の解剖図譜こそがオランダの近代解剖学の始まりと、後世の解剖学者や医史学者により、評

価されるようになった。

アルビヌスの 'homo perfectus' の哲学に基づいた大きな美しい解剖図譜と比較し、クルムス、ディクテンの『解剖学表』は、版型が比較にならないほど小さいポケットサイズである。また収載してある解剖図の作製に際しても、アルビヌスの扱ったオリジナルの解剖図作製のための精巧な技術と手間とは比較にならないほどの安易な方法が、クルムス、ディクテンの『解剖学表』の編集の際にはとられている。すなわち死体の精密な描写などは行なわれず、既出の解剖学者向けの図譜から、そのエッセンスだけを取り出し、図を縮小し、デフォルメして、『解剖学表』に掲載した。

解剖学者だけでなく、解剖学をその医学教育の最初の段階で修得する現在の医師、医学者の目からは、史料に基づいてこの点を検証するまでもなく、両者の解剖図を一目比較するだけでそれは明らかである。

クルムスの解剖書の解剖図が装飾過多で、真実を伝えていないと評価されている点は、すでに一八世紀中に、クルムスと同時代人であるフランス人解剖学者の A. Portal により、「クルムスは解剖に対し高い見識を持っている。しかしながら、それは時代遅れの見識で、しばしば劣った引用をしている。Malgugi の業績の紹介を忘れ、時代遅れの Bidloo、Verheyen やよび Palpin の業績を称賛している」と批判されている。^{(17), (80)}

この鋭い批判からも判るように、クルムスは一八世紀の解剖学者としては、当時から高い評価を得ていない。⁽¹⁴⁾ としてクルムスとディクテンの『解剖学表』は、疑いもなくオランダの大学の解剖学教育の水準に達しない書と評価されている⁽³⁷⁾ (大学の解剖学教育の水準に達した近代的な図譜は、ディクテンがライデンのギルドの要職を務めた時代のライデン大学解剖学教授 B・S・アルビヌスが著した)。しかしこの本はオランダの外科医界に広く普及し、外科医に向けてよく売れ、版を重ねた。

従って (大学の水準の) 解剖学の業績で、当時からクルムスはヨーロッパで注目されることはなかった。

医史学は大学を基盤として、大学人により研究されてきた学問であるので、クルムスもディクテンも、ほとんど文献

に記載されることがなかったのである。

しかし『解剖学表』がオランダの外科医に向けてよく売れたから、またバロック解剖学的な図譜ではあるが、コンパクトに解剖図がまとめられていたから、出島のオランダ人外科医を通じ、日本に持ち込まれたのである。

ヨーロッパでは前近代的と評価される『解剖学表』の翻訳書『解体新書』が、日本では近代医学の始まりと高く評価されている点は、評価自体の質に根本的な違いがあるゆえ、興味深い。

大学の解剖学の水準に照らしての『解剖学表』のヨーロッパにおける芳しくない評価を我々が今まで知らなかったことがその理由の一つであるが、また「近代」という用語の定義が、ヨーロッパと日本で異なっているということも、もう一つの理由であると考えられる。

日本において「近代化」という用語は、無意識的にしばしば「西洋化」と同じ意味として使われている。そうした意味合いにおいて、前近代的なバロック解剖学の『解体新書』も、日本では「近代」に含まれるのかもしれない。

ディクテンの史料検索、読解にあたり、ライデン大学H・ボイケルス教授の助けを借りた。ここに深謝する。この論文の研究費の一部は文部省科学研究費（基盤研究C—二—一〇六八〇〇九）を充てた。

文献および註

- (1) ライデン市公文書館 史料 A G (Archieven van de Gilden の略、以下同) 351 Knechten f.35.
- (2) (1) より逆算。
- (3) ライデン市公文書館 史料 A G 351 Knechten f.34.
- (4) ライデン市公文書館 史料 A G 351 Knechten f.55.

- (5) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.60.
- (6) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.63.
- (7) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.75.
- (8) クネヒトとは徒弟になり、数年間親方から教育を受け、最初の資格を得た以後の身分である。従って、広義の徒弟期間はまったく資格を有しない前半の狭義の徒弟である期間と、最初の資格試験に合格した後のクネヒトと呼ばれる期間からなる。クネヒトを有資格徒弟とした。
- 理念としては以上のようなものであるが、一次史料および現在のオランダ人の論文には、狭義の徒弟、有資格徒弟のいずれもをクネヒトで表現しているものもある。すでに原史料において混乱が見られるのである。本論文への引用は、状況を見ながら両者の使い分けを慎重に行なった。
- (9) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.79.
- (10) 町外科医とは町で開業している外科医を意味しない。町外科医は市当局により任命された公職であり、困窮者収容所に収容されている病人や、貧しい病人に対し、外科治療を施した。
- (11) ライデン市公文書館 史料 Wet en Nominatie AG 348a.
- (12) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.84.
- (13) ヘンドリック・ユールホルン (Hendrik Uhoorn, 1687-1746) 外科医。ドイツ人外科学者ハイステルの『外科学』を蘭訳した。
- (14) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.97.
- (15) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.100.
- (16) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.105.
- (17) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.106.
- (18) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.111.
- (19) ライデン市公文書館 史料 AG 351 Knechten f.111.

- (20) ライデン市公文書館 史料 A G 351 Knechten f.113.
- (21) ライデン市公文書館 史料 A G 351 Knechten f.113.
- (22) ライデン市公文書館 史料 A G 351 Knechten f.114.
- (23) ライデン市公文書館 史料 A G 351 Knechten f.120.
- (24) ディクテンがライデン大学に入学登録した記録は、アルバムというライデン大学記録簿 (W.N. du Rieu: *Album Studiosorum Academiae Lugduno Batavae MDLXXV-MDCCCLXXV*, Hagrae Comitum 1875) に収載されている。しかしながら、彼がMDを取得して卒業した記録はアルバムには記されていない。しかし一七四〇年に出版されたディクテンの著書『*Alle heel- ontheed- en geneskundige werken*』初版(アムステルダム刊)の見開きの彼の称号にはMDが付けられており、ディクテンがライデン大学からMDの称号を授与されたことは確かであると考えられる。当時、こうしたアルバムからの記録の遺漏はよく見られた。
- (25) *Bibliotheca Medica Neerlandia. Ex Officina de Bussy, Amsterdam, 1930.* 最大のオランダ古医書目録であるこの本より、筆者が編集した。
- (26) 酒井恒『ターヘルアナトミアと解体新書』名古屋大学出版会、名古屋、一九八六
- (27) 原文では「医学」と翻訳されているが、この部のHeelkundeは「正確には「外科学」と翻訳するほうが正しいと考えられるので、そのように書き直した。
- (28) Hendrik Punt: *Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature'* Amsterdam, 1983, 他。
- (29) A.M. Luyendijk-Elshout「バロック時代のオランダ解剖書(いわゆる革新解剖学)とその内容と表現」『*日本医史学雑誌*』一九巻、三七七-三八三頁、一九七三
- (30) G.A. Lindeboom: *Dutch Medical Biography*. Rodopi, Amsterdam, pp 434-435, 1984.
- (31) *Het Historisch Genootschap te Groningen: Album Studiosorum Academiae Groningen*. Groningen, p 453, 1913.
- (32) G.A. Lindeboom: *Dutch Medical Biography*. Rodopi, Amsterdam, pp 1387-1389, 1984.
- (33) 蒲原宏「日本へのパレ外科全書骨関節損傷治療の受容についての再検討—スクルテタス (Scultetus) 外科書 (AR-

MAMENTARIUM CHIRURGICUM) との対比とその影響』『日本近代外科の源流』、五一〜八二頁、メディカル・コア、東京、一九九二

- (34) A. Hirsch: Biographisches Lexicon der Hervorragenden Aerzte Aller Zeiten und Völker, Wien & Leipzig, vol V, pp 298-299, 1887.
- (35) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography. Rodopi, Amsterdam, pp 1129-1130, 1984.
- (36) 大村敏郎他『近代外科の父・ハル』、二五一〜五六頁、日本放送出版協会、東京、一五二〜一九〇頁、一九九〇
- (37) A.M. Luyendijk-Elshout: 'Ontleedinge' (Anatomy) as Underlying Principle of Western Medicine in Japan, 'Red-Hair Medicine Dutch-Japanese Medical Relation', Rodopi, Amsterdam, pp 27-36, 1991.
- (38) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, Rodopi, Amsterdam, pp 9-12, 1984.
- (39) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, pp 9-12, 1984.
- (40) Johannes Jacobus Rau (1663-1710) 解剖学者、一七二三年から一七一九年までライデン大学医学部教授
- (41) Gorvert Bidloo (1649-1713) 解剖学者、一六九四年から一七二三年までライデン大学医学部教授
- (42) Frederik Deckers (1644-1720) 内科学者、一六九四年から一七二〇年までライデン大学医学部教授
- (43) Herman Boerhaave (1668-1738) 一八世紀のオランダを代表する内科学者、一七〇九年から一七三八年までライデン大学医学部教授
- (44) Jakob Benignus Winslow (1669-1760)
- (45) Joseph Guichart Duverney (1648-1730)
- (46) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, Rodopi, Amsterdam, pp 9-12, 1984.
- (47) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, pp 9-12.
- (48) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, pp 9-12.
- (49) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, pp 9-12.
- (50) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, pp 9-12.

- (51) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, pp 9-12.
- (52) Andreas Vesalius (1514-1564) 解剖学者、革新的な解剖図譜『ファブリカ』を一五四三年に公刊
- (53) Bartholommeo Eustachius (1524-1574) 解剖学者
- (54) Bibliotheca Medica Neerlandica, Amsterdam, p 63, 1930.
- (55) Frederik Ruysch (1638-1731) 解剖学者、薬師の徒弟奉公で、一六六一年に薬師の資格を取得、一六六四年にライデン大学でMDを取得、一六六六年に阿姆斯特ダム外科医ギルドの解剖学講師
- (56) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', B.M. Israel, Leiden, p 5, 1983.
- (57) B.S. Albinus: De ossibus corporis humani, Leiden, p 3, 1726.
- (58) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, p 7, 1983.
- (59) B.S. Albinus: Historica musculorum hominis, Leiden, 1734.
- (60) B.S. Albinus: Tabulae sceleri et musculorum corporis humani, Leiden, 1747.
- (61) B.S. Albinus: Tabulae ossium humanorum, Leiden, 1753.
- (62) G.A. Lindeboom: Dutch Medical Biography, pp 9-12.
- (63) Van Gool: De nieuwe schouburrg, II, pp 169-178.
- (64) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, p 15, 1983.
- (65) B.S. Albinus: Icones ossium.
- (66) B.S. Albinus: Historia.
- (67) Delineationes anatomicae.
- (68) Van Gool: De nieuwe schouburrg, II, pp 169-178.
- (69) B.S. Albinus: Acad. Annot., I, p 8.
- (70) Peterus Camper (1722-1789) 一八世紀のオランダを代表する解剖学者、一七四六年ライデン大学医学部卒、一七五〇年フランクフルト大学教授、一七五五年阿姆斯特ダム・アテネウム教授、一七六三年グロニンゲン大学教授

- (71) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, pp 15-16, 1983.
- (72) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, p 17, 1983.
- (73) Vesalius: Brief, p 186.
- (74) Hoboken: Anatomia, pp 261-264.
- (75) Choulant: History, p 135.
- (76) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, p 18, 1983.
- (77) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, pp 17-18, 1983.
- (78) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, pp 18-46, 1983.
- (79) 石田純郎「マルコムスとライクテンー一八世紀オランダの解剖学と『解体新書』」『一滴』二号 一—四七頁、一九九四、津山洋学資料館
- (80) A. Portal: 'Hisoire de l'Anatoie et de la Chirurgie', Paris, Tome IV, p 628, 1770.
- (81) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, p 5, 1983.
- (82) Cushing: A bio-bibliography of Andreas Vesalius, London, p 134, 1962.
- (83) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, pp 69-75, 1983.
- (84) Hendrik Punt: Bernard Siegfried Albinus (1697-1770), On 'Human Nature', Leiden, pp 17-18, 1983.

(新見女子短期大学)

A Study of G. DICTEN (1696?-1770), the Author of “Ontleedkundige Tafelen,” Translated into Japanese as “Kaitai-shinsho”

Sumio ISHIDA

The Dutch original title of “Kaitai-shinsho” is “Ontleedkundige Tafelen.” This anatomy book was translated from the German edition written by J.A. Kulmus and published in 1734 in Amsterdam by the Leiden surgeon Gerrit DICTEN. The author searched for documents of G. DICTEN at the Leiden Municipal Archives and the Municipal Museum ‘Lakenhal.’ This study reveals his personal history. G. DICTEN was born in 1696 or 1697. He became an apprentice under surgeon master J. van Riet in 1713. He obtained a ‘leerbrief’ in 1715, and changed his master to J. Steenveld in 1716. DICTEN obtained a surgeon’s license in 1721 and opened a surgical clinic at Bree Straat. He was frequently chosen as a member of the board of the Leiden surgeons’ guild. He educated 11 apprentices from 1721 to 1731. DICTEN participated in the publication of 5 surgical books. “Ontleedkundige Tafelen,” translated by DICTEN, was commonly used by surgeons, however this book is a tiny handbook and it is now estimated as representing premodern ‘baroque anatomy’ in Europe.